
親しい間柄ですか？

良崎歓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親しい間柄ですか？

【著者名】

良崎歓

N1291W

【あらすじ】

転校生の女の子は、「機械」。

ロボット少女と、そのお守り役に指名された男子高校生との一年を五百字で綴ります。

自サイト「SHIRENZ」からの転載です。

「誰でもトライ20のお題」をまから「梅」セットをお借りしています（配布元リンク切れ）。

01 完全無欠（前書き）

文章の練習のために、五百字前後といつ制限内で書いた連作です。
短くてさりとて読めるので、暇つぶしなつたらいな、と思いま
す。

01 完全無欠

転校生は口ボットらしい。

馬鹿げた噂は驚くべきことに事実だった。職員室から教室に案内するまでの間だったが、隣を歩く美少女　いや、少女のように見える精密機械の扱いに、僕は困り果てていた。とりあえず間を持たせようと自己紹介してみる。

「クラス委員の鳥海鉄之介です」

「トリウミテツノスケさん、私は七富ファーです。平均的な十七歳女子以上の知能、運動能力で設定されています。一年間、データ収集と感情プログラムの調整を行います」

彼女はガラス玉のような灰色の瞳で僕を真正面から捉え、抑揚のない声で無表情に答えた。なるほどこれは機械だ。

「テストでいいよ。あだ名。皆そう呼ぶから」

「アダナ?」

「友達同士で使う名前のこと」

「私とトリウミテツノスケさんは心を通い合わせることが可能な、親しい間柄ですか」

辞書のような質問に苦笑しつつ頷くと、彼女は「了解です、テスさん」と、やはり無表情で答える。僕はファーの最初の『友達』に認定されたらしい。

これまでのファーにはあだ名という概念がなかつたのだろう。つまり、データベースにない事柄を勉強しに転校して來たということか。彼女が完璧ではないと知った僕は、思わず微笑んでいた。

02 つれない君

「ファー、さん」

七宮ファーは僕の呼びかけに、無言で三センチほど顔を上げた。首の動きに伴って、綺麗な銀色に光る人工毛髪が乾いた音を立てる。

「次は化学だけど、移動教室だから」

「化学実験室ですね。移動の予定は前回の授業時にすでにインプット済みですし、実験室の場所も記憶しています、テスさん」
ファーは無抑揚で言うと、教科書とノートを手に席を立つと教室を出て行つた。まるで、無愛想という言葉をそのまま表すかのような態度には、取り付く島がない。

クラス委員だから、とファーの世話人として指名されたことについては、当初は理不尽だと思ったものの、もう諦めた。しかし、肝心の彼女自身が何もさせてくれない状態では僕の出る幕はない。

そもそも、僕は『世話役』の存在意義が分からなくなってきたいた。転校初日こそ、彼女人間臭い部分を見つけて好印象を持ったものだったが、次の日からのファーは僕の助けなど全く必要としなかつた。すべてをパーフェクトにこなし、一分の隙も見せないまま一日を終える ファーの学校生活は、その繰り返しだった。

僕は自分の立ち位置に悩みつつ、自らも化学実験室へと向かう準備を始めたのだった。

放課後、僕は生徒昇降口でファーを見かけた。雨がぱらつく夕方の空を一心に眺めている彼女は、ひどく真剣だった。いい加減、口ボツトに気を使うのにも倦んでいた僕が興味を引かれたほどなのだ。どれほど異質な姿だったかは推して知るべし、である。

僕は、ファーに話しかけた。言葉を交わすのはずいぶん久しぶりのような気がする。

「何見てるの？」

ファーの隣で見上げると、青空にも関わらず落ちてくる雨粒が光つて眩しい。彼女は、空から目を離さずに答えた。

「雨といつのは、晴天時でも降るのですか？」

おや、と僕は思う。それはこれまでのような機械的な音声ではなく、語尾が上がった疑問形だったからだ。

「ああ、天気雨ね」

「テンキアメ？」

「うん。空が晴れても降つてくれる雨のこと」

「天気雨。無事データを収集」

彼女はそこでやっと僕の方を向くと、「ありがとう」と軽く頭を下げた。その一瞬、僕はファーが機械であることを忘れた。

ファーはこうして、人との触れ合いの中で少しずつ『人間』に近づいていくのだと、僕は遅ればせながら悟った。しかし、彼女が一年間でどれほどの知識と感情を身に付けるのか、この時の僕には、まだ知る由も無かった。

体育の授業が終わり、校内へ引き上げる。そんな生徒たちの流れに従わず立ち止まつたのは、ファーだった。彼女は通りかかった僕に気づくと、地面を指差した。

「これは、何ですか？」

天気雨以来、僕はファーから色々と尋ねられることが増えていた。初対面の頃と比べれば信頼されてはいるのだろう。今、彼女が示しているのは、春の風物詩の白い綿毛。

「タンポポの種だよ」

「キク科の植物ですね。その種子」

「うん。息をかけると飛んでくよ。やつてみたら?」

冗談半分で付け足した最後の一言を真に受けて、彼女は素直に頷いた。茎を摘んで渡してやると、彼女は精密機器らしく繊細な仕草で吐息をそつと吹きかけた。

宙に舞う白い群れを見送つた後、ファーは「私の語彙では表現できません」と呟いた。

「何?」

「的確な擬態語が登録されていません」

ファーの記憶装置には、綿毛が飛ぶ様子を表す言葉がないということらしい。僕が無い頭を捻つて思いついたのは……。

「うーん。……『ふわふわ』とか」

「ふわふわ、ですか。ふわふわ?」

新しい単語を確認するように、何度も繰り返すファー。僕は何だからもつと見ていたくなり、綿毛をもう一つ彼女に手渡したのだつた。

僕は担任からの頼まれ事のため、ファーを探して校内をうろうろしていた。普通の生徒が昼食をとるこの時間、ファーは教室から消える。彼女には確かに食事の必要がないが、では一体どこで何を？「何してるの、こんなところで」

僕がファーを見つけたのは視聴覚室だった。普段は施錠されていて、その鍵は職員室で管理されているから、彼女はわざわざ教師から許可を貰っているのだろう。人がいなくて静か、居心地はよさそうだ。

「充電中です。テスさんこそ、何か？」

椅子に掛けた彼女の腰の辺りからはコードが伸び、その先はコンセントに刺さっている。市販の家電と同様に充電可能だなんて、さすがは『ナナミヤ』製。しかし、少女と電気コード　なまじファーが可愛らしく作られているだけに、シユールな光景だ。

制服をたくし上げたコードの出所からは肌色が覗いている。人工皮膚だとは分かつているが、ロボットとはいえ仮にも女子だ。気を回した僕は手早く伝言を伝えると「お邪魔みたいだから」と早々にお暇することにした。

「別に構いませんよ、テスさんなら」

後ろから追ってきた声は果たして現実か、それとも空耳だったのか。僕は、逃げるように視聴覚室を去った。

授業が終わり、僕は掛けていた眼鏡をケースに戻す。隣に座つたファーはその様子をしげしげと観察していた。目が合つたので、僕は不思議に思つて彼女に聞いてみた。

「眼鏡、珍しい？」

「はい。私には、『視力が悪い』という感覚がないので」

「そつか。試しに掛けてみる？」

頷いた彼女は、受け取った僕の眼鏡をそつと顔に添える。ファーの女性らしい顔にスクエアフレームの黒縁眼鏡は強すぎるのか、どうもしつくりこない。しばらくして、ファーは律儀にも掛け心地をレポートしてくれた。

「装着した状態では、ピントを上手く合わせられません。……そう考へると、人間の目はよくできているのですね」

「でも、ファーの方が色々と優秀じゃないの？」

「機能上はそうです。ですが、私は人間にはなれませんから」

ファーが、ぽつりと呟く。

彼女は、口ボットなのだ。僕ははつとして息を飲んだ。ようやく学校生活に馴染んできたファーとの間に、やはり見えない壁があることを認識してしまつたから。

恐る恐る、僕は尋ねる。

「……ファーは、人間になりたいの？」

「……いいえ」

それはいつものように抑制の効いた声だったが、眼鏡を外した彼女はどことなく寂しげに見えた。

「ファー、おはよつ」

朝の喧騒の中、銀色の後ろ姿を見かけた僕は彼女に呼びかけた。しかし、ファーからはいつものような返事は無い。その代わりに、僕の鼻先には一枚のメモ用紙が差し出された。

「ん？ 何？」

ファーは、何か言いたげに口をぱくぱくさせながらメモ用紙を指差す。いいから読んで、といったところか。

そこには、まるで市販のフォントのような字で『人工声帯が故障しました。修理は放課後、工場に戻つてからです』とある。つまり、今日いっぱいは筆談で過ごすことになるのだろう。

「不便だね」

僕の言葉に、ファーは首を横に振る。

「そんなに不自由じゃない？」

今度は頷く。彼女は立ち止まると、新しいメモ用紙に何事かを書き付けて僕に手渡した。

『私が困っていると、皆さんが何かとフォローしてくれます。それがとても嬉しいので、大丈夫』

読み終えて顔を上げると、ファーと目が合つた。彼女は僕に軽く頭を下げ、先に立つて教室へと向かう。

ファーの声が無い一日は、きっと味気ないものになるんだろうな
そんなことを考えてしまった自分に気づき、僕は手にしていたメモをくしゃくしゃに丸めるとポケットに入れた。何故だか、顔が火照っていた。

下校中のファーは、僕に気づくと手を上げて寄ってきた。
彼女からは最近、徐々にだが機械らしさが抜けてきたように思つ。
彼女の学校生活の目標である『感情プログラムの修正』は上手く進
んでいるのだろう。

「今、コンビニで友達の分もアイス買ったところ

「今日は気温が高いですか」

「ほんと、暑くて参るよ。あ、多めにあるから、どう?」

僕は返事を待たず、「一瞬に盛り付けられたソフトクリームのパ
ッケージを破つて手渡した。

「味は分かりますが、こんなに沢山は無理です。残してしまいます
から」

いつもは食事を取らない彼女だが、味覚自体はあるらしい。ファ
ーは受け取りながらも、戸惑ったように首を傾げた。

「残つたら僕が貰うよ。……あ、変な下心とかじゃなくて」

アイスと彼女の顔、それに地面に視線をさまよわせながら、止せ
ばいいのに弁解する。それとは対照的に、ファーは静かに目を細め
た。その笑顔に限りなく近い表情に、僕は一瞬見惚れてしまった。

「では一口だけ貰つて、あとはテスさんにお任せしますね」

宣言どおり味見だけすると、ファーは礼を言つて去つた。残され
た僕は食べかけのソフトクリームが溶けるまで、複雑な思いで立ち
つくしていた。

学年が変わつて半年、今日からは『後期』のスタート。委員や役員も改選され、新たな体制が始まる。

僕も、ファーの世話役ではなくなつた。

たまたまクラス委員だったから彼女のお守りを頼まれていた、それ以上でもそれ以下でもないはずなのに、この寂しさは何だろう。そんなことを考えれば考えるだけ、気が滅入つてくる。

そんな不純な思いを見透かしたかのように、ファーが僕の席へと近づいてきた。

「テスさん。……後期も、これまで通り面倒を見ていただけたらと思ふのですが」

「でも僕、もうクラス委員じゃないよ

「私の仕組みを最も理解して下さつているのは、テスさんです。誰でもいいわけではありません。……駄目でしょうか」

ファーはわずかに眉を寄せると、真っ直ぐに僕を見つめた。そんな風に頼まれて断れるわけがないと、彼女は知つてゐるのだろうか。僕はわざとらしく頭を搔き、悩むふりをしながら答える。

「うーん。……分かつたよ。じゃあ、先生にはファーから言つておいてもらえる?」

はい、といい返事をして微笑み、ファーは僕に頭を下げた。その頬が何となく赤く染まつてこるように見えたのは、きっと僕の気のせいだと思うけれど。

「ファー？」

はつとしたように顔を上げた彼女は、辺りを見回して僕に気づくと、申し訳なさそうに目を伏せる。心ここにあらずといった様子は、メンテナンスで日々最高の状態に保たれているはずのファーには有り得ない姿だった。

「悩み事？」

僕は彼女に倣い、目線を低くして尋ねる。すると、ファーは「分かりません」と即答した。もしかしたら彼女には悩みという概念自体が無いのかもしれない。しかしそれならば原因不明の不調に見舞われて、なおさら苦しいだろう。

「嫌じやないなら、話すと楽になるかもよ」

「テスさんに迷惑は」

ファーはそこまで言いかけたが、僕の顔を見るとかすかに微笑んだ。

「……研究員から、オーバーヒートが多くすぎると指摘されました。もし不良品と判断されれば開発は終了、つまり学校に来られなくなるということです。ここが大好きだから、それだけは嫌です」

彼女には珍しく、言葉が堰を切ったように溢れ出てくる。

大丈夫と無責任に励ました僕に、軽く頷くファー。強がりだと分かつてはいたが、彼女の表情は会話の前よりも確実に明るい。それに比べ、『僕も嫌だ』の一言も出せない自分がどうにも情けなく、

僕は拳を握りしめていた。

高校生ともなると、例え音楽の授業とはいえたまに歌う生徒などほとんどいない。そんな中、僕の耳に届くのはファーの歌声だった。音程も歌詞も正確で、文句のつけようが無い。僕のように聞き入ってしまい、自分の歌が疎かになっている生徒も少なからずいるようだつた。

「歌、上手いよね」

一曲歌い終わり、僕は彼女を褒めた。しかしファーの血口評価は、あくまでクールだ。

「歌ではなく、ゆらぎもないただの音です。私の声は人間に心地良いよう調整されていますから、テスさんのような感想を持つのは当然です。……でも、声に頼らず、他人に感銘を与える歌が歌えると素敵ですね」

最後の方はまるで夢見るよつこ、ファーは呟いた。「このところ湿りがちだった表情が、今日は明るい。前向きな彼女を見て調子に乗つた僕は、冗談めかして提案してみることにした。

「じゃ、カラオケにでも行つて練習する?」

「からおけ?」

「……仲間うちだけで好きなだけ歌える施設、かな」

「それは、ぜひ行きたいです」

ファーの表情が、ますます輝く。半ば騙したかのようであるのは認めるが、僕とファーとの初デートと表現していいのかどうかは、こうして実現したのだった。

隣のファーと目が合った。見返す僕に気付くと、彼女はぱつが悪そうにそっぽを向く。

妙に気になつて、僕はノートの端に『何か用事?』と書き付け、ファーの机の方へと押しやつた。

『すみません。テスさんを観察していました』

彼女は先生が黒板に向かつたのを確認し、返事をくれた。僕の眉間にますます皺が寄るのを見たファーは、さらに書き足す。

『機械と人間の違いとは何かを考えていって』

『僕なんか参考になんないよ?』

ファーは何かを思い詰めたような表情で、静かに首を振る。

恐らく彼女は、機械と人間 そんな深く重いテーマを、転入してからずつと考えているはずだ。もしかしたらそれを追求するのがナナミヤの狙い、ファーが作られた理由なのだろうか。だとしたら、彼女の背負つた使命は途方もなく大きい。

今にも悩みに潰されそうな顔をしている彼女を励まそうと、僕は大きな字で答えを書く。

息を飲んだファーは一瞬目を丸くしたが、すぐに満面に邪氣のない笑みを湛えて僕を見た。僕も、ファーと顔を見合わせて笑う。

『ご飯を食べるか食べないか』

一緒に過ごしてきた月日が教えてくれる。僕にとつては、ファーと僕との違いなんてその程度なのだ、と。

「私と、寄り道しませんか」

「どうしたの、突然」

ファーが大真面目に言つので、僕は思わず聞き返した。大抵は学校が終わるとナナミヤの研究所に直行している彼女が、今日に限つて、いつたいどういう風の吹き回しなのか。

彼女は眉を寄せると、小さく呟く。

「……実は、研究の一環なんです。自由行動時の感情変化を見たいとのことで」

「ふーん」

僕にはよく分からぬが、ロボットの寄り道はナナミヤにとっては貴重なデータになるらしい。

ファーが全く意識してくれていないといふことは少々悲しいが、理由は何にせよ、これはデータに違いない。そのパートナーに僕を選んでくれたのなら、喜んで実験台になろう。

「気を悪くされましたか？」

僕を見つめる灰色の瞳が不安げに揺れている。

沈黙が誤解されてしまったのかも知れないと、僕は慌てて首を横に振つた。平静を装いつつ、ファーに尋ねる。

「どこか、行きたい場所とかある？」

「私はそういうことに詳しくないので、テスさんに教えてもらおうと思いました」

ファーは妙に自信に満ちた表情でそう口にした。どうやら、責任重大みたいだぞ 胸の中で嬉しい悲鳴を上げながら、僕は教科書を鞄に収め始めた。

クラスメイトを遠目で眺めながら、ファーが首を傾げている。不思議に思つて声を掛けると、彼女は「指輪とは」と切り出した。

「既婚者が左手薬指にするものでは?」

見ると、クラスの女子の右手薬指にはシルバーのリングが光っている。ファーのデータベースには、結婚指輪以外の項目がないらしい。

「右手にもするよ。ファッショング目的だとか、結婚前に好きな人に貰つたりとかだと」

「それは、特別な『好き』のことですね」

「ファーはそういう人いないの?」

僕はなけなしの勇気をここぞとばかりに振り絞つて尋ねた。いい、と言つてくれるることを願いながら、ファーの口元を何気なく見守る。

彼女はしばらく黙つて自分の右手を眺めていたが、やがて途切れ途切れに白状した。

「『好き』は認識できませんが、顔を見ているだけで嬉しくなる人はいます」

「……じゃ、きっとファーはその人が好きなんだ」

「そうでしょうか。しかし、同時に寂しさ、悲しさを感じることもありますが」

「そういうもんだよ」

「心というのは、難しいですね」

自分で訊いたことながら、僕の淡い期待は打ち砕かれたこととなつた。ファーの咳きは、まさしく今の僕の気分にぴったりの一言だった。

時々、乾いた音を立てて薪が爆ぜる。夜空に高々と上がる炎を見上げ、ファーが呟いた。

「すいぶん激しく燃えていますね」

冬の球技大会は、応援に使った横断幕などを燃やす焚き火で幕を開じる。例年、表彰式が終わると、生徒たちは中庭へと出て来て、この火で体を暖める。だが、みんなが集まるのは暖を取るためだけではない。

「球技大会名物でさ。胡散臭いんだけど、願いを書いた紙を燃やすと叶うって。ファーもどうぞ」

メモ用紙を手渡すと、彼女は長い間考え込んだ末に何とかを記す。覗き込むと、ファーらしくもない震えた文字の列が、塗りつぶされ、消されていた。

それでも何とか、『来年も見られますように』と読み取れる。確かに、ファーの試験登校期間は今年の三月までだが。

「何で消したの？ 来年、またおいでよ」

「私に来年はありません」

「え？」

「登校期間後、改良と分析のため、データは回収され、ボディは分解されます。七富ファーは消えるのです」

「うそだろ！」

「私は機械。偽りのデータは出しません」

ファーは無表情に告げると、絶句する僕の手から紙を取り戻して火にくべた。炎に照られた横顔は紅く染まり、血が通っているかのようだった。

「今日は、女性が男性にチョコレートを贈る日ですね」

そう言つて、ファーは僕の目の前に小さな紙袋を突き出した。これは、と思わず喜びかけたものの、僕はすぐに心の中で首を振つた。彼女は以前、好きな人がいると言つていたはずだし、何より、ファーが本命と義理、そもそもバレンタインの意味を知つているとも思えない。

「チョコチップクッキーです。レシピ通り正確に作りましたので、おいしいはずです」

照れの一つもない真っ直ぐな彼女の目に、これは分かつてないだろつと改めて思う。まあ、例え深い意味はなくとも、彼女から貰えたということだけでも嬉しいのだが。

「ありがとう。甘いもの好きだし、喜んでいただくな」

「それは、作つて良かつたです」

手ぶらになつたファーは、僕の言葉ににこりと笑つた。その後もなぜかその場に佇んでいる彼女に、僕はたまらず声を掛ける。

「ん、どうかした？」

「……いえ、何も」

では明日、と言い残して、ファーは教室を後にした。

受け取つた袋は、意外に軽い。何気なく振つてみると、お菓子の包みらしきものが乾いた音を立てた。普通に食べたら、三十秒かそこらでなくなってしまう量だろう。

さて、どうしたものか。

17 右に曲がります

終業式。世話係としての僕の最後の仕事は、見送りだった。

他愛無い会話の間に、僕たちは校門へとたどり着いてしまった。
ここを出て右へ曲がれば、ファーはいつものように研究所へと帰り
そして、いなくなる。

「本当にお世話になりました。世間知らずの機械の相手は、大変だ
つたのではないですか？」

「確かに、戸惑つたけどね」

僕の素直な言葉に、ファーは俯き、恥ずかしそうに笑つた。
はじめは、ロボットのお守りなんて嫌だつた。

しかし今は、一年前の彼女には無かつた優しい表情が僕を満たして
くれる。僕は、ファーが誰よりも人間らしく、可愛らしいということ
を知つてゐる。

「今、ファーは僕にとって、ちゃんと一人の人間だよ。今さらこんな
こと言つたってファーは困るだろうけど、明日もあさつても、ずっと
一緒にいたかった。……君が、好きなんだ」

ファーは目を丸くして立ち尽くしていたが、やがてその場にしゃ
がみ込んでしまつた。

「あり、が、とう」

顔を隠すように覆う両手の奥から、かすれた声の後に嗚咽が漏れ
出す。泣きじゃくる彼女の肩に触れると、かつてないほどに熱かつ
た。

「研究所まで、送るから」

それは、僕にできる最後の抵抗だった。

ファーが行方不明だとナナミヤの研究所から連絡がきたのは、終業式の翌日。予想外の知らせに驚いた。なぜなら僕は前日、彼女の処遇を巡って研究員と派手にやり合っており、てっきりお叱りの電話だとばかり思っていたからだ。

しかし、さらなる驚きがやつてきたのはその後だった。

「突然すみません」

僕の家の玄関に立っていたのは、部屋着のような灰色のワンピース姿のファーだった。どうやら彼女は着の身着のままで抜け出してきたらしい。

ファーは「返事をするために、来ました」と前置きすると、顔をしっかりと上げて微笑む。

「私を人間にしてくれたのは、テスさんです。……あなたの隣にいると嬉しいし、いないと寂しい。それが恋といつものなのだと、私は昨日やっと理解しました」

僕の胸に押し当たられた頬は、濡れていた。熱を帯びた手も、伝わる肩の震えも、明日にでも解体される機械のものとは到底思えない。

「私も、テスさんが好き。あなたも同じ思いなら、今だけでも隣に

」

「今だけなんて、言わないでよ」

その日僕らは、ナナミヤが彼女を迎えて来るまで一緒に過ごした。それは短いながらも、これまでのファーとの一年の中でも最も幸せな時間だった。

ファーが欠けた毎日にはいつまで経っても慣れることができなかつた。

その点から言つと、春休みに入つて、学校へ行かなくて済むのはありがたかった。隣同士で座つた教室、彼女を送つた通学路 僕にとつて学校は、彼女との日々そのものだからだ。

例えば、ファーなんて口ボットは最初からいなかつたのだと信じ込むことができたならば、まだ自分を納得させることができるだろうに。しかし、そんなことはもはや不可能なほどに、彼女は僕の中に居着いている。

喉の渴きを覚えて何気なく開けた冷蔵庫に、小さな包みがある。ファーがバレンタインデーにくれたクッキーが、食べる決心のつかないまま入れてあつた。

「……やっぱ食べられないよ、ファー」

僕は、手に取つたクッキーの包みを握りしめていた。くしゃくしゃと包装がひしゃげる音がして、その存在を主張する。

これはファーがいた証だ。確かに僕と触れ合つた、人間より人間らしい『七宮ファー』の形見なんだ。

知らず溢れてきた涙に、最後に会つたときのファーの体の温もりが蘇つてくる。僕はファーと別れてから初めて、声を上げて泣いた。

『ファーの試験登校期間が無期限で延長される』

知らせを受けた僕がナナミヤに着くと、ファーは制服姿で待ちかまえていた。駆け寄ってきた彼女に思い切り飛びつかれて、意外と重みがあることに気付く。ボディの内部はほぼ金属だから当然だが、今日はそんな些細な発見すらも宝物のようだ。

「私の脱走のおかげなんですよ」

「変なの。……元家出娘の言葉とは思えないよ」

「それなら、テスさんは家出の共犯ということになりますが」

妙に得意げなファーの笑顔に、僕もつられて笑う。

実際、彼女の言う通り、終業式翌日の『脱走』がこの結果に繋がったらしい。彼女の感情と行動のプログラムからすると完全にイレギュラーな行動に、研究員たちが興味を抱いたことだった。ならば、これからは僕らの恋も研究対象となるのだろう。もっと僕の中では、再びファーと過ごすことができるといつ事実一つで、そんな不安など帳消しにされているのだが。

彼女も同じようなことを危惧しているのか、やや顔を曇らせて僕に尋ねた。

「私は、あなたともつと親しくなることができますか?」

「うん。……これ以上ないって程に、ね」

僕の言葉に、ファーは笑みを浮かべて目尻を指で拭つた。

20 すべりこみヤーフ（後書き）

サイトでの完結時に書いた後書きは下記のURLです。

<http://silent-siren.blog77.fc2.com/blog-entry-263.html>

いろいろと言い訳をしておりますので、よろしければJR覧下せ。

これで、「親しい間柄ですか？」本編は終了です。

この後、番外編がいくつありますので、できればそちらもどうぞ。

「私とトリウミトツノスケさんとは心を通い合わせることが可能な、
親しい間柄ですか」

「うん。……そして、もつともつと親しくなれるよ」

【番外編1】 春雷（前書き）

「親しい間柄ですか？」本編を連載する前に書いた、いわばプロトタイプにあたる500字小説です。

500字で小説を書くバトンをいただいたときに書いたものです。
ここに出てくるフターとテスは本編の二人（の、つもり）です。
少し雰囲気が違うかもしれませんが、よろしければどうぞ。

【番外編1】 春雷

「ファー、おはよ
雨の匂いが漂う通学路、僕は前を行く同級生を呼び止めた。振り返ると、シャラシャラという無機的な響き。人工毛髪が擦れた音だろうか。

「予報見た?」

にこりと笑って、ファーは手にした鞄を叩いた。

「雷ですね。……念には念を入れて、予備電源まで持つてきちゃいました。テスさん、もしものときは」「任せて」

僕は胸を叩いてみせた。

外見は限りなく人間に近いが、ファーは精密機器だ。落雷で調子を崩すことはよくあるし、一時的にスリープして自身を守ることさえある。僕はクラス委員として、そんなときの復帰の手順を教え込まれているのだった。

「アンドロイドも、色々と大変だね」

ファーが人間社会に懸命に馴染もうとしているからこそ、間近で見ている僕には辛いときもある。そんな気持ちから出た何気ない一言に、ファーはその辺のヒトよりもヒトらしい表情で空を見上げた。「私、この季節が好きですから。いつも今頃 センサが雷を感じると、数日後には平均気温が上昇して、みんなの顔も明るくなります。そういう人間も、好き」

少し照れくさそうに、ファーが微笑む。僕は春のような温かさに満たされながら、雷鳴を遠くに聞いていた。

【番外編2】 バースデイ（前書き）

本編終了後の春のひとこまです。

【番外編2】 バースデイ

一度目の始業式を迎えるファーは、僕を見かけると早足で近寄ってきた。

「無事に進級しました。……クラスは、テスさんと同じです。ナナミヤからはたらきかけがあつたようです」

「あ、なんだ」

研究所もたまには役に立つことをするもんだ、と内心思ったが、口に出すのは止めておいた。僕があまり良い感情を抱いていないとはいっても、ナナミヤはファーにとつては親のようなものだ。よく見ると、確かにファーの制服のネクタイは最高学年を示す色に変わっている。

おや、と僕は首を傾げた。プログラムの設定上は、彼女は永遠の十七歳だったと思ったのだが。もしかすると、例えば誕生日が来たら設定が自動的に一歳上がる　そういうアバウトなものなのか。だとすれば、そもそも、誕生日はいつなのだろうか。

「じゃあ、ファーは今年度中に十八歳になるの？」

「そういうことになりますね。……初めて、誕生日を設定してもらいました」

「へえ？　お祝いするから、教えてもらえる？」

わざとらしくはなかつただろうかと気を揉みながらも、僕はそう尋ねることに成功した。ファーは辺りを見回すと、僕にだけ聞こえるように囁く。

「あなたの家で一緒に過ごした、あの日です」

【番外編3】 不良品 - another side - (前書き)

本編「不良品」の後の、フラーの小話です。

【番外編3】 不良品 - another side -

再々点検でも異常なし。しかし、ラボの中では至つて正常なのにも関わらず、登校すると中頻度でオーバーヒートを起こす。原因は不明。

緊急点検の結果が打ち出された紙を見て、私は今まで感じたことのない『心』が自分の中に膨らんでくるのを感じた。
もしもこのまま直らなかつたら、私はどうなるのだろう。
当初の予定通り分解されて、分析に回されるのだろうか。
もともと一年限りの学校生活なのだから、たとえ今、退学したつて構わない。少しだけ楽しいと感じ始めていたけれど、仕方がないことだ。私は機械だから。不良品なら、仕方がない。

テスさんにも会えなくなるけれど。

そこまで考えたところで、まだボディに繋がつたままだつた計器から警報音が鳴りだした。確認すると、『高負荷』を示す赤いランプがせわしなく点滅していた。頬や首に手をやってみると、熱くなつていてる。冷却が追いつかないほどの熱だ。

人間で言うと、これは『病』なのだろうか。

原因不明で、治らない病氣？

分からぬ。そんなこと、私の中のデータにはないから。

警報音は鳴り続ける。研究員に聞かれぬよう、私はそつと計器との接続を切つた。

【番外編4】 風靡するほど仲がいい（前書き）

サイトの8周年記念で書いた掌編です。
いつもの500字よりは、少し長めのお話。
ファーはいつもどこでも勉強しているのです。

【番外編4】 喧嘩するほど仲がいい

並んで歩いていたファーが突如立ち止まる。混雑している洋菓子店の、ちょうど出入り口前あたり。人の流れに揉まれながら、彼女は小さく呟いた。

「更新、しました」

ファーの中に、新たなデータが追加されたらしかった。

外見は完全に人間の女の子だが、彼女 七宮ファーは世界的な家電メーカーが製作し、試運転中の大型ロボットだ。その試験の舞台に選ばれたのは僕の高校、僕のクラス。そして、彼女の世話を命じられたのが僕。簡単に説明すると、こんな味気ない言葉になる。僕の胸中はそれよりも少し複雑で、しかも上手く言葉にはできない気持ちが多分に含まれる。自信を持つて言えるのは、僕の中のファーは、勉強熱心で、ちょっとだけ世間知らずな転校生 そのくらいのものだ。

「今は、何を覚えたの？」

「『喧嘩するほど仲がいい』の具体例です」

ファーは大真面目に言うのだが、僕はつい吹き出してしまった。

「何か、おかしかったですか？」

笑いをこらえる僕にとどめを刺すかのように、ファーが重ねて言った。つまり『喧嘩するほど仲がいい』はすでに覚えていたが、先ほどそれ違つた中に正にそういう人たちを見かけたので、その目撃例についてさらに記録した、ということなのだ。

わずかに眉を寄せて困惑を表すファーに、僕は謝った。

「笑つてごめん。全然おかしくないよ。……ただ、そういうときに

『具体例』とはあまり言わないから、ちょっと新鮮だつたんだ」納得したのかしないのか、彼女は浅く一、三度頷いた。ファーは基本的に、あまり大きなリアクションを見せないが、これでも、転校当初よりは大分表情豊かになつたのだ。

相変わらず真顔で、ファーは尋ねた。

「揉めたとしても、心が通じ合つていれば最終的には仲直りすることができる。喧嘩の前よりも深く繋がることができる。私はそう解放しました。これは、間違っていますか？」

「間違つてない。きっと、そうだと思います」

僕は、先ほど大笑いしてしまったことを今更ながら後悔し、恥じた。僕たち人間が深く考えずに流してしまったことに、ファーは正面から向かっていき、悩んで、彼女なりの正解を導き出している。それなのに、僕はどうだ。

「ファーは偉いね。僕、見習わないと」

「プログラム通りに行動することは、偉くありません。私が『偉い』という評価を得るのは、『人間らしい』行動を能動的に行つたときのみ。それは、プログラムの外にあります」

「プログラムされてたとしても、人間以上のことをやつてると思つんだけどな」

ファーは自身を口ボットだプログラムだと言つが、僕は彼女をそんな風には見ていない。そこで意見の違いが生じているわけなのだ。

が。

この隔たりを埋めるには、どうすればいいのだろう。沈黙した僕に、ファーは思わぬ提案をした。

「テスさん。私たちも、喧嘩をしましようか？」

「え？」

これは、プログラムされたものか、そうではないのか。

僕はファーを見つめる。彼女の灰色の瞳が、『人間らしく』やらめいたような気がした。

【番外編4】 露隠するほど仲がいい（後書き）

ちなみに、「その、幽かな声を」という小説の中に、この掌編とりんクした「混信」というお話があります。

<http://nocode.syosetu.com/n5973u/33/>

「その、幽かな声を」は、人間の心の声や妖怪たちの声を聞くことができる少年と、山の神との現代恋愛ファンタジー（完結済み）です。よろしければそちらもどうぞ。

【番外編5】 Far Ver・0.90 Ver・0.91 (前書き)

本編6話「黒ぶちメガネ」の後日談です。

一週間の欠席ののち、ファーは以前と何ら変わらぬ様子で登校してきた。思えば、僕が世話係となつてから、彼女がこんなに長く休むのは初めてだった。

「一週間も休むから、心配してたよ。バージョンアップとしか聞いてないんだけど」

「ええ。微細な改良点がたくさんあります、それらをまとめて調整したのです。急な話だったので、事前にお知らせできませんでした」

何を改良したというのだろう。不躊躇にじろじろと眺める僕に、ファーは淡々と「外見上は何も変化がありませんよ」と言った。

「じゃあ、どこが変わったの？」

「細かいところなので、どう説明すれば」

彼女は言葉を切った。唇に手を当てて、何とかを考え込んでいる。

これは、珍しいことだった。ファーは基本的に、『悩む』ということ彼女に言わせれば、内部の様々な処理に時間がかかるつくる状態、だそうだ　がほとんど無い。しかし、いつもなら打てば響くように帰つてくる答えが、今日はなかなか出でこない。

「あ、別に、言いにくいならいいよ」

慌てた僕は、必要以上に首を振つた。

詳しく述べたところで、一介の高校生である僕に理解できるとは思えない。それは、最初から分かっていた。

ただ、これまでの彼女とこれから彼女との間に何か違いがあるとすれば、ぜひ知りたい。好意を持つ相手の世界に、より踏み込んでみたい。

そんな不純な疑問だったから、ファーを困らせるのもかわいそうだと思ったのだ。

「例えば、ですが」

不意に、ファーは僕の方へ手を伸ばしてきた。目を丸くしている僕の顔に、温度を持たない、ひんやりとした手の感触があった。すっと抜き取ったのは僕の眼鏡。彼女はそれを、自らの顔にそつと乗せた。

「眼鏡を掛けても、ピントが合わせられるようになります」

僕の迷いを知つてか知らずか、彼女の世界は軽々とレンズを飛び越えてきました。しかし、残念ながら、眼鏡を失った僕の視界はぼやけたままだ。

僕は思いきつて、ぐい、と身を乗り出す。近視の僕にでもファーの表情が分かるくらいだから、かなりの至近距離だ。僕の眼鏡を掛けた彼女の姿を、まじまじと見つめる。

「やっぱり、見た目も前とは違つてるよつた気がするなあ

「そんなことはないはずですが」

ファーはいつも通り、即答した。その頬が赤らんでいるように見えたのは、僕の気のせいだつただろうか。

【番外編5】 Far ver . 0 · 90 ver . 0 · 91 (後書き)

「親しい間柄ですか?」は、このお話で完結です。
最後までお読みいただいて、ありがとうございました。

後書きは下記のURLにあります。

<http://silent-siren.blog77.fc2.com/blog-entry-263.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1291w/>

親しい間柄ですか？

2011年9月19日03時12分発行